HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「連帯度」による開拓部落の測定・分析
Author(s)	金田, 弘夫; KANETA, Hiroo
Citation	北海道大学農經論叢, 16, 1-24
Issue Date	1960-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10784
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_p1-24.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

「連帯度」による開拓部落の測定・分析

金田弘夫

目次

一　序　論
二　測定プロセスにおける問題の整序
三　尺度文章の修正
四　尺度項目の検定
五　測定結果とその比較
六　領域別にみた連帯度の分析
七　結　論

一　序　論

本論叢第十五集（前号）において、私はフェスラー（D. R. Fessler）が展開したCommunity Solidarityの概念とその測定方式を明らかにし、又これに若干の修正を加えた尺度によつて、北海道の七つの戦後開拓部落と四つの既存農村における連帯性の実測を試み、その結果について報告した。この研究において、私は「連帯度」というフェスラーが与えなかつた独自の単位の設定を試み、フェスラーの測定方式を一段と発展させると共に、連帯度の算出による開拓部落と既存農村におけるこれが特性の違いについて比較分析する基調を

確立した。しかしながら、この前研究においては、重点を適用可能にしてより有効な単位の設定と、それによる比較の可能性の立証においた為、共同社会連帯の実測をめぐる基本的な測定手続上の諸問題及び諸要件については充分検討するいとまがなかつた。従つて求められた開拓部落における連帯性及び連帯度をめぐる数値乃至はこれが判断、解釈に基く特性の記述は、あくまで測定手続における問題を最小限度に処理した限りに於て求められたものであつて、これを絶対視し得る検証は充分施されていなかつた。

本稿に於ては、かかる見地から、連帯性の尺度化のプロセスに対し必要とされる統計的処理と社会学的吟味を施し、既に得られた連帯性の特性を表示する指数に一層の精度を与えると共に、これによつて改めて連帯性をめぐる開拓部落の特性についてその一般化（generalization）の純度を高めようとするものである。従つて本稿は前号所載の拙稿（以下「前稿」と称す）に対し、その続論的意義をもつものであり、また既に把えた開拓社会における社会連帯を繞る観察・分析の方法を手がかりとして、これを一層発展させたものに外ならない。その結果、算出された数値や特性分析の結果も前稿と若干異なつたものとなつたが、これは、爾後の実験や確認によつて、測定方法により精度を高めることが出来た為であり、これにより測定結果について信頼に値する根拠がはじめて附与されたことになる。

前稿については、発表後社会学及び農業経済学関係の諸先生方から、様々なる関心が与せられた。教室関係の先生方はもとより、とくに京都大学臼井二尚教授、関西大学岩崎卯一教授からは適確なる御批判と激励の言葉を賜つた。ここに、これ等の先生方に対して、衷心より謝意を表明すると共に、なほ本測定調査に御協力下さつた現地開拓関係の皆様方をはじめ、極めて複雑にして煩瑣なる集計操作に対し、長期間に亘つて協力してくれた、本学農業経済学教室の諸君にもここに重ねて深謝の意を表したい。

註 (1) 北海道大学「農経会論叢」第十五集、拙稿「開拓部落における連帯性の測定」昭和三十四年三月

二　測定プロセスにおける問題の整序

フェスラーの共同社会連帯の測定基盤が、理論的には「一次的な農村共同社会は、それ自身の社会的行動に対する一連の価値観念と共通の規範とを所有する社会集団として機能する」という F. T. Hiller が唱えた社会集団についての命題におかれ、またこれを援用した

ものである点については、既に前稿において詳述した所である。ところで今吾々が、この方式に基いて、北海道の開拓社会の如き特殊な地域社会を対象とし、その社会連帯の特色を測定しようとする場合、当然次の如き諸点が疑問となり、又これについての吟味を施されなくてはならない。

(1) 北海道の農村社会の如く地域的に広汎な共同社会や、戦後の開拓部落の如く計画化され、しかも歴史の短かい社会の如きものには、果して Hiller のいうが如く、これらの社会に固有なる価値観念や、或いはある程度慣習化された共通の（一般的な）行動規範の体系なぞが存在するであろうか。もしあるとすれば、それはどのような規範内容のものであり、また如何なる概念のもとに把握されるものであろうか。先ずこの点が問題となる。

(2) 次に、所与の農村共同社会に内在する固有の価値観念や行動規範に対して、その構成員が内面的に保持する意識には相互に喰い違いがあり、又その違いに恒常性があるとは限らないが、もし然りとすれば、この各個における意識の差異と変容とを尺度化によつて把えんとする場合、その質的属性の変容を如何なる標識によれば量的に置き換え、かつ固定することが出来るか。

(3) 尺度化によつて付与された数の関係が、連帯性という社会事象や社会的事実における特定の関係（意味的関係を含む）を適確に表示しているということを何によつて証左することが出来るか。

以上の諸点が少くとも最小限度において問題の核心をなすものであり、これについての問題整序と操作手続の吟味を展開しなければならない。

第一の問題については、二つの解決方法が考えられる。一つは、農村社会についての既存の諸理論を北海道の農村に適用し、これによつて理論的に北海道農村の特性を描き出し、その中から当然理論的に肯首され得る形において、農村社会の価値観念や行動規範の体系を求める行き方である。今一つは、精密にして大規模なサンプリング・メソードによる実態調査の方法により、開拓部落の価値観念や行動規範についての現象意識の収集を行い、これを分類、整理して、規範意識の類型範疇を固定する行き方である。この外にも両者の折衷方式なぞも考えられない訳でないが、それも煎じつめれば前者か後者のいずれかに属することになろう。

これらの二つ解決法に対して、本研究では別に第三の方法として、次の如き理由に基く整序の方法をとつた。

先ず理論的には、デュルケームの「社会的事実」を基礎づける社会的拘束(contrainte social)やマックドーガルの集団心(group mind)ギデングスの複数行動(pluralistic behavior)等の諸説は Hiller の所説に矛盾するものではなく、むしろ Hiller の所説は、その発展とみられる。ギデングスが後に複数行動の研究に際して統計的方法の重要性を強調して、彼の門下からチェーピン(F. S. Chapin)ライス(A. R. Rice)の如きすぐれた数量社会学者が輩出した如く、Hiller の所論を基調として Fessler がその尺度化の方式を展開したことは決して偶然でもなければ、また暴挙でもなく、そこに測定化の要望とこれに対する傾向が見られる。もとより、社会的拘束、集団心、複数行動等がそれぞれの基本的事実であり、そのものが即ち社会の本質であるか否かについては軽々に論断出来ないものがある。しかし、これらの諸説を一つの前提とし、又仮説として、現実社会を解明する仕方は方法論的に一連の可能性があり、むしろそうすることによつてこそ、それぞれの論議の正当性が実証されると見られる。従つて、吾々としても、仮説として、Hiller の命題を北海道の開拓部落に設定することは何等差しつかえないばかりか、社会学における最近の一動向に応える意味をもつものとみられる。

しかし、更に一歩進んで、より具体的に、所与の社会的価値観念や行動規範の現象形態を詳細に展開しようとすると、この方法では、地域社会のこの面における特殊性は具体化されない、即ち普遍性が高く、一般化された程度の高い規範内容なら理論的にも把え得るが、この地域社会に固有する価値体系になると、実態調査による方法がよりすぐれており、これにまつより外はない。所が実態調査によつて特殊化を進めれば進める程、規範観念体系の様式も特殊化され、遂には部落社会の数だけ規範体系が求められる結果となる。その体系をフェスラーの要領によつて尺度化し、測定すれば、もとそりその一部落社会の連帯性を実測することができるが、しかしその結果は極めて特殊具体的な特殊性の強い内容のものとなり、それに基ずいて構成された個々の尺度はもはや再適用性がなく、又普遍性(universality)もなくなるおそれがあり、また測定結果を単純に比較することも出来なくなつてしまうきらいがある。まして社会構成員の意識体系や同調主体の内面的流動性可変性を考慮に入れ、更に調査時点のずれなどを考慮すると、この種の操作は全く測定の為の測定に終始し、一般化(generalization)の困難なものとなつてしまうおそれがある。

この種の困難を避けるには、規範体系即ち規範の現象形態をある程度「標本化」(model)することが最も望ましい。標本化の方法は、割当法やアンケート法における標本化とは異なり、むしろこの場合は典型法(representative method)における標本概念に準ず

るものとなる。即ち、農村の場合なら、いくらかの農村のタイプを想定し、各タイプからモデル村をきめて、そのモデル村において把えた規範体系を「標本」とする行き方をとらざるを得ない。従つて、ここでは戦後開拓地の場合なら、典型的な開拓地をえらび、そこを調査して求められた規範、価値体系をもつて、戦後開拓社会におけるこれが標本と見做す行き方となる。しかしこの方法においてはモデル村として選定された開拓地が、全体（戦後開拓社会全部）をよく表現するものであるかどうかという点においては、更に別な方法をとらなくては、何等の保証もあたえられないという欠陥をともなう。

そこで本稿では、フエスラーの想定した連帯性測定の標識を開拓社会にも適用可能なる適用性のある「標本」または「模型」と仮定し、実測の結果について尺度項目の妥当性の検定を施せば、消極的ではあるが、開拓部落における規範、価値体系としての適用性は認められると仮定して、尺度項目の検定結果を重視し、これに期待して再検討することにした。

次に第二、第三の問題点、即ち行動規範や価値体系に対して社会構成員が内面的に保持する意識の尺度化をめぐる合理性の問題であるが、この二つの問題も亦第一の問題と同様一つの仮定を前提としなければ解決出来ない。意識の相互差は、同質面においては、「より大きい」「より小さい」という表現形式をとつて示される。フエスラーの「平均値」と「標準偏差」による合意の程度の把握の仕方は、この要求にそむくものではないが、しかし吾々が、彼の尺度を本道の開拓地に適用する場合には、彼我のコミニュテーのメンバーによる意識構造に基本的な質的意味的違いの存在することを忘れることは出来ない。フエスラーの場合、スコアの平均値が高い時は、当該共同社会の価値観念や行動規範定型に対して、成員が高い点数を与えた結果として、その価値的意味を肯定的に意識しており、逆に平均値が低い時は、その規範に対するメンバーの価値意識は劣つているという具合に解釈されるから、一応対象相互間に序列（rank order）や程度の差を与えることが出来るが、しかし、合意の程度差（標準偏差）はこの場合平均値にはあらわれない。この欠陥は本稿において設定した「連帯度」によつてはじめて補足される。即ち連帯度によつて、規範や価値に対する成員の肯定的志向性と否定的志向性（orientiation）の所在が意味的に把えられると同時に、それについての合意の強さ大きさが把えられる。このことは、それぞれの共同社会における意識の一構造面としての連帯感の強さと相互の間隔の差とを量的にあらわすことになるのであつて、そこに量化による比較の可能性を与える根拠が認められることになる。また次元範疇をことにする規範については、これをフエスラーの設けた八つの連帯

領域に対応するように限定を施せば、異質的要素の混淆をさけることが出来る。

以上の如くして、測定プロセス上における諸問題を整序すれば、実験的操作として、フエスラー尺度の適用はあながち不能ではない。もつとも測定上の問題としてはこの外にも信頼度の問題や、誤差の問題等がともなうが、これらについては、爾前、爾中、爾後的操作によつて可成り条件を満足させて行くことが出来る。

そこで以上の方針に従つて、ここでは先を急ぎ実験的に試みた測定操作の過程を以下具体的に展開してみる。

三　尺度文章の修正

本道の開拓部落に対するフエスラーの測定尺度の適用に際して、生活様式の差違から、当然尺度文章に修正を施す必要があることについては、前稿においても触れた所である。しかし前稿においては、むしろこの点から必要とされる最少限度の修正を試みたに違ぎず、しかも「連帯度」という単位のもつ特性から要求される尺度文章のアレンジについては十分なる操作を施さなかつた。如何なる尺度文章であつても、これに数値を与えて計算すれば何等かの結果が出るものであるが、尺度文章に妥当性のない場合は、当然その結果も信頼するに足らぬものとなる。もとよりそれは、たとえ信頼するに足らぬ虚偽のものであるからとて、これをもつて直ちに正当性のない誤謬と判ずることはできないかも知れない。しかし測定結果により高い精度を与えようとする時は、当然尺度項目に対する適格なる吟味と修正が必要とされるのである。

今、フエスラーが創定した八つの連帯性の領域に従つて、それぞれ五項目よりなる尺度文章の原文と、本測定において使用した修正文章とを対比させ、必要な説明を加えると次の如くである。

COMMUNITY SOLIDARITY INDEX SCHEDULE

I. Community Spirit.（部落の気風）

5. A lot of people here think they are too nice for you.

（9.） 部落の皆さんは貴方をとくに親切にしていると思つている。 5 ——→ 1

13. People won't work together to get things done for the community.

（16.） 部落の皆さんは，村や部落の為になる仕事を協力してやろうとしない。 1 ——→ 5

21. The community tries hard to help its young people along.

（23.） この部落では，青年たちの生活のことに熱心に意を用いている。 5 ——→ 1

29. The people as a whole mind their own business.

（30.） この部落の皆さんは一般に自分の仕事に熱心である。 5 ——→ 1

37. No one seems to care much how the community looks.

（37.） この部落の人達は，この部落が他人からどんな風にみられても平気である。 1 ——→ 5

II. Interpersonal Relations.（対人関係）

1. Real friends are hard to find in this community.

（6.） この部落では本当に腹を打ち割つて話の出来る親友を求めることは無理である。 1 ——→ 5

9. Almost everyone is polite and courteous to you.

（13.） この部落の皆さんは貴方を大事に扱つてくれる。 5 ——→ 1

17. People give you a bad time if yon insist on being different.

（20.） この部落の人は貴方が何か変つたことをすると辛くあたるようなことがない。 5 ——→ 1

25. I feel very much that I belong here.

（27.） 貴方はこの部落の一員であつたことを大変よかつたと思う。 5 ——→ 1

34. People are generally critical of others.

（34.） この部落は一般に他人に対して批判的である。 1 ——→ 5

III. Family Responsibility（家族の責任感）

6. Families in the community keep their children under control.

（10.） この部落の人達は自分のうちの子供をよく監督している。 5 ——→ 1

14. Parents teach their childen to respect other people's right and property.

(17.) この部落の親達は，他人の権利や財産を尊重するよう，よく子供たちをしつけている。 5 ——→ 1

22. Folks are unconcerned about what their kids do so long as they keep aut of trouble.

(24.) この部落の人は，自分の子供がとくに面倒なことを起さぬ限り，何をしていても平気である。 1 ——→ 5

※30. Most people get their families to Sundy School or church on Sunday.

(31.) この部落の人たちは，自分の家族を村の年中行事に参加させることに熱心である。 5 ——→ 1

38. If their children keep out of the way, parents are satisfied to let them do whatever they want to do.

(38.) この部落の人たちは，自分の子供が危い所で遊んでいるようなことが無ければ，何をしていても平気である。 1 ——→ 5

IV. Schools (文教)

2. Our schools do a poor job of preparing young people for life.

(2.) この村の学校では，若い者の生活の足しになるようなことをしない。 1 ——→ 5

※10. Our schools do a good job of preparing students for college.

(3.) この部落の学校では，上級学校の入学準備をよくやつている。 5 ——→ 1

18. Our high-school graduates take an active interest in making their community a better place in which to live.

(4.) この部落出身の高校卒業生は，この部落をよくする為に積極的に関心をもつている。 5 ——→ 1

※26. Many young people in the community do not finish high school.

(5.) この部落の子供たちは，上級学校に沢山入る。 5 ——→ 1

33. Most of the students here learn to read and write well.

(1.) この部落の学校の生徒は皆勉強に熱心である。 5 ——→ 1

V. Churches (宗教)

※7. The different churches here cooperate well with one another.

(11.) この村の宗教団体はお互にうまく折合つている。 5 ——→ 1

※15. Most of our church people forget the meaning of the word brotherhood when they get out of church.

(18.) 宗教を信じている人が案外教えを守らぬ。 1 ——→ 5

23. The churches are a constrctive factor better community life.

(25.) この村の宗教団体は部落の生活向上に建設的役割を果している。 5 ——→ 1

31. Eevry church to be the biggest and the most imperessive.

(32.) どの宗教団体も自分が一番有力なものになろうとしている。 1 ——→ 5

39. Most of our churchgoers do not practice what they preach.

(39.) 宗教を信じている人が，そこで教えられたことを実行に移さないというようなことはない。 1 ——→ 5

VI. Economic Behavior (経済行動)

※3. Local concerns deal fairly and squarely with everyone.

(7.) この村の店屋では誰でも不公平なくサービスしている。 5 ——→ 1

11. Everyone here tries to take advantage of you.

(14.) この部落の人たちは貴方を少しでも利用してやろうと思つている。 1 ——→ 5

19. A few people here make all the dough.

(21.) この部落では皆が苦労しているのに，一部の人が楽をしている。 1 ——→ 5

27. The people here are all penny-pinchers.

(28.) この部落の人たちは皆な，お金がなくてピーピーしている。 1 ——→ 5

※35. Local concerns expect their paid help to live on low wages.

(35.) この村で傭主になる人は使用人の賃金が安くとも生活の足しになるからよいと思つている。 5 ——→ 1

VII. Local Government (地方行政)

8. Some people here "get by with murder" while others take the rap for any little misdeed.

(12.) この部落では一部の人がひどいことをやつても許されるのに，他の人がちよつとしたことをしても，ひどい目に逢せられるようなことがない。 5 ——→ 1

16. This community lacks real leaders.

(19.) この部落には真の指導者なぞいない。 1 ——→ 5

24. The mayor and councilmen run the town to suit themselves.

(26.) 村長や議員たちがこの村を自分の都合のよいように運営している。 1 ——→ 5

32. A few have the town politics well sewed up.
(33.) 少数の人たちが村政を牛耳ている。 1 ——→ 5

40. The town council gets verey little done.
(40.) 村会議員はさつぱり仕事をしてくれない。 1 ——→ 5

VIII. Tension Areas（緊張関係）

4. The community is very peaceful and orderly.
(8.) この部落は非常に平和で秩序正しい。 5 ——→ 1

12. People around here show good judgment.
(15.) この部落の人たちはもの判りのよい方である。 5 ——→ 1

20. Too many young people get into sex difficulties.
(22.) 若い人に男女関係のことで悩んでいる人が多い。 1 ——→ 5

28. You must spent lots of money to be accepted here.
(28.) この部落に仲間入りをするには大分お金を使つて振舞わねばならぬ。 1 ——→ 5

※36. You are out of luck here if you happen to belong to the wrong nationality.
(36.) 仮に貴方が日本人でないとしたら不幸な目にあわせられている。 1 ——→ 5

(註)※は修正変更を受けた尺度文章。（　）内の数字は聴取順序，1 ——→ 5，5 ——→ 1 は尺度文章の意味に対する肯定度の方向とスコア。

以上の如く、本調査測定においては、四十項目中、八項目を修正変更した。この修正変更は第四部の文教（Schools）第五部の宗教（Churches）第六部の経済行動（Economic Behavior）に多いが、これは国情を異にする関係から、それぞれの制度、慣習の相違に由来する。第三部の「日曜学校」をめぐる風習も、日本では一般化されていないので、これを「年中行事」に変えたが、この三十番の項目文章の如きは修正変更を必要とする最も代表的な一例である。

次に尺度文章の肯定方向に対するスコアの与え方であるが、尺度文章のもつ規範的意味には部落員にとつて、「好ましい」ものと「好

ましくない」もの及び「どちらともいい難い」ものとがある。例えば、Ⅷの Tension Area における 4.（8）「この部落の人達はもの判りのよい方か」という尺度文章は、意味的に「もの判りのよい方」が「好ましい」ものと部落では考えられており、かかる意味において部落の共通の価値観念となつているから、これに対して強く肯定するものには5.点以下 4. 3. 2. 1. と順にウエーテングに方向性を与え、3は「判らない」1は強く否定したものに与えられるスコアとして別に差しつかえはない。またⅤ. の Churchの 15（18）「宗教を信じている人が案外教えを守らぬということがないか」という尺度文章においては、「ある」と答えた場合の肯定性は、共同社会規範的、価値的水準においては「好ましくない」傾向である。従つてこの場合は逆に1――――→と5肯定の強さに応じてスコアが与えられる。しかるに、37の「この部落の人達は、この部落が他人からどんな風にみられても平気か」という文章の如きにあつては、「平気」なのが「好ましい」のか、「平気でない」のが「好ましい」のか、外部の者には判らない。この種の尺度文章は外にも散見されるのであるが、これをどのように取扱うかが実際において一つの問題となる。この問題については、コンサルタント・メソードにより部落の有力者や、村長、役場の開拓関係者及び校長などと相談して、規範の意味的志向性の所在を確める方法をとつて解決した。

さて、以上の如くして、尺度文章の構成が成り立つたので、これを直ちに実測にかけることにしたが、聴取りの効果をあげる為に、従前の経験に基き、聴取り順序を変更した。原文では、導入文章が、Ⅱの「対人関係」から選ばれているが、私共の測定調査では、Ⅳの「文教」から入ることにした。これは私ども調査員が大学関係者である関係上、「勉強のこと」から質問を開始する方が、相手にとつても答えやすかつたためである。

四　尺度項目の検定

上記の尺度文章はそのまま尺度の標識（index）として用いられるが、そのためには、あらかじめ各標識が全体として測定の目標である連帯性の把握に有効であり妥当であるか否かを検定によつて明らかにしなければならない。また本稿ではあらたに「赤井川」五十戸を編入したため再検定を展開して妥当性を確めねばならない。その方法としては種々なるものをあげることが出来るが、ここでは項目の内的一致性による検定を施すこととし、「リツカート簡略法」を用いた（1）。この方法は各項目についての取得スコアの平均値の有

意差によつて、一定の水準により項目の有意性合否を定めるものであつて、検定に用いられた母集団は、大学生二十九人、知識人十七人、農村青年二十三人、新聞社十一人、ニセ、ロマンチイ二十一人、赤井三郎十人、合計百五十一人であつた。

今前記四十の項目文章につき検定した結果を一覧すると、第1表の如くである。

第 1 表　リツカート法による項目検定の結果

尺度文章項目 No.	上限S.D.（平均値）	下限S.D.（平均値）	スケールのdの値	$\bar{x}$.との差	検定合否	再検定結果	尺度文章項目 No.	上限S.D.（平均値）	下限S.D.（平均値）	スケールのdの値	$\bar{x}$.との差	検定合否	再検定結果
Ⅰ. C. S. No. 5	2.588 (4.11)	1.122 (3.50)	0.95	0.61	不合格	不合格	Ⅲ. F. R. 6	0.975 (3.75)	0.768 (2.10)	0.57	1.65	合格	−
13	0.740 (4.45)	1.136 (2.75)	0.60	1.70	合格	−	14	0.955 (4.05)	0.921 (2.45)	0.64	1.60	〃	−
21	1.062 (3.65)	1.005 (2.30)	0.67	1.35	〃	−	22	1.045 (2.90)	0.894 (2.00)	0.63	0.90	〃	−
29	0.805 (4.55)	1.187 (3.70)	0.65	0.85	〃	−	30	0.663 (4.40)	1.108 (3.15)	0.57	1.25	〃	−
37	0.625 (4.10)	0.963 (2.85)	0.52	0.27	不合格	合格	38	0.647 (4.20)	0.695 (1.95)	0.44	2.25	〃	−
Ⅱ. I. R. 1	0.794 (3.90)	2.110 (2.55)	0.50	1.35	合格	−	Ⅳ S. 2	0.806 (4.10)	1.112 (2.45)	0.65	1.65	〃	−
9	0.477 (4.35)	0.708 (2.70)	0.38	1.65	〃	−	10	0.669 (4.05)	1.257 (1.35)	0.68	2.7	〃	−
17	0.781 (4.20)	1.005 (2.30)	0.65	1.90	〃	−	18	0.900 (2.70)	1.050 (2.00)	0.64	0.7	〃	−
25	1.205 (3.50)	0.683 (2.20)	0.65	1.30	〃	−	26	1.208 (2.80)	3.57 (1.15)	0.63	1.65	〃	−
34	1.030 (3.20)	2.748 (2.20)	0.57	1.00	〃	−	33	0.669 (4.05)	0.979 (2.80)	0.55	1.25	〃	−

V. C.							Vll. L.G.					
7	0.727 (3.35)	1.072 (2.50)	0.55	0.85	合　格	−	8	0.995 (4.10)	1.238 (2.55)	0.75	1.55	合　格	−
15	0.888 (3.10)	1.152 (2.65)	0.67	0.45	不合格	合　格	16	1.376 (3.65)	1.643 (2.05)	1.00	1.60	〃	−
23	1.030 (2.80)	0.468 (1.30)	0.54	1.50	合　格	−	24	1.072 (3.95)	1.710 (2.45)	0.90	1.50	〃	−
31	0.735 (3.60)	0.864 (1.95)	0.54	1.65	〃	−	32	0.768 (4.25)	0.972 (2.45)	0.57	1.80	〃	−
39	0.922 (3.50)	1.322 (2.45)	0.70	1.05	〃	−	40	1.009 (3.35)	1.120 (2.20)	0.65	1.15	〃	−
Vl E. B.							Vlll.T.A.					
3	0.921 (3.95)	0.900 (2.75)	0.60	1.20	〃	−	4	0.800 (4.05)	0.883 (2.40)	0.55	1.65	〃	−
11	0.812 (4.20)	1.115 (2.65)	0.65	1.55	〃	−	12	1.068 (3.60)	0.669 (2.55)	0.60	1.05	〃	−
19	1.049 (4.00)	1.279 (2.30)	0.77	1.7	〃	−	20	1.288 (3.85)	1.040 (2.25)	0.75	1.60	〃	−
27	1.382 (2.70)	0.573 (1.65)	0.65	1.70	〃	−	28	0.458 (4.70)	1.054 (3.95)	0.50	0.75	〃	−
35	0.927 (3.80)	1.127 (2.65)	0.68	1.15	〃	−	36	0.707 (4.30)	1.188 (2.70)	0.65	1.60	〃	−

第一表に示した如く、検定の合否は「**ベケールのdの値**」（d）が「**平均の差**」（$\bar{x}$. D）より小なる時、即ち **d**＜x. D なる時は合格であるが、逆に **d**＞x. D の時は不合格となる。従つて本表によれば四十項目中三項目が不合格であり、その項目番号は **5, 37, 15** である。これら不合格の項目については、別に今一度検定に付すことになる。そこでこの二次的再検定の結果をしめすと**第2表**の如くである。

第2表によつて明らかになる如く、最終的には三つの不合格項目中二つは救済された形となり、結局、⑤の「部落の皆さんは貴方

第2表　二次的検定の結果

領域及び項目No.	上限S.D.（平均）	下限S.D.（平均）	スケールのdの値	x.との差	信頼区間 上限〜下限	合否
I. C. S. 5	0.660 (4.11)	1.091 (3.90)	0.62	0.20	0.82〜0.42	不合格
37	0.803 (3.80)	1.061 (2.65)	0.65	1.15	1.80〜0.50	合格
IV. S. 15	0.993 (3.450)	0.917 (2.60)	0.75	0.85	1.60〜0.10	〃

をとくに親切にしていると思つている（か）」という尺度文章のみが不合格となつた。その実質的理由は、この項目が何を意味しているのか被験者には直感的に理解出来ない点があるため、正しい反応を求め難いためであり、自分に対する扱いを他人がどう思つているかというような事柄は所詮自分には判らないことに属するからである。

かくして、第五番の尺度文章を除き都合四十九項目をもつて尺度を編成したが、このため、第一領域の「共同社会の気風」は四項目編成となつた。そこでこの領域だけは連帯度その他の算出に当つては、残された四項目をもつて五項目に代替させねばならず、そのためにこの四項目についての取得スコアに、補正指数一二・五を乗じて、不合格項目の出現にともなう埋立を講じた。

註(1)　検定法によつては、村田宏雄外共著「社会調査の技術」昭和三十年誠信書房版、二六〇頁以下参照。

五　測定結果とその比較

以上の尺度項目の編成によつて、次に実測した結果を明らかにすると**第3表**、**第4表**の如くである。本年度は昨年度の研究に引継き、あらたに余市郡赤井川村所在の開拓地（常盤、落合部落）五十戸についての実測に成功したので、開拓地の母集団は八地点となり、調査農家戸数は計百八十五戸となつた。このために調査時点は昭和二十八年から三十四年まで七年間に亘ることとなつた。また調査に当つては、部落悉皆調査をむねとし、聴取相手は原則として世帯主とした。

第3表によれば、八つの領域における連帯度が平均値において、最も連帯度の高いのは「新内」の**0.480**である。また最も連帯度の低い開拓部落は「共和」の**0.131**である。連帯度をあらわす指数は**1.00**が最高であるが、**0**点が固定されておらず、マイナスもまた現われる特性をもつている

第 3 表　開拓部落の連帯性及連帯度の測定結果　　連帯度，Max＝1.00

所在	調査年度	開拓部落名及総スコア	領域別／項目	I C. S.	II I. R.	III F. R.	IV S.	V C.	VI E. B.	VII L. G.	VIII T. A.	平均
後志	昭和34	赤井川（常盤・落合） 128.0 (50戸)	平均	18.4	15.8	17.0	14.0	14.9	15.1	15.7	17.1	16.0
			S. D.	2.79	3.34	3.28	3.31	2.61	3.16	3.30	2.96	3.24
			連帯度	**0.281**	**0.159**	**0.217**	**0.116**	**0.208**	**0.187**	**0.168**	**0.285**	**0.203**
知床・斜里	31	岩尾別 116.7 (17戸)	平均	17.1	12.7	14.5	13.1	13.6	15.5	14.0	16.2	14.6
			S. D.	3.63	2.49	2.38	3.64	2.28	2.30	2.91	2.79	2.80
			連帯度	**0.122**	**0.302**	**0.375**	**0.003**	**0.383**	**0.415**	**0.222**	**0.323**	**0.268**
十勝・足寄	31	大与地 123.2 (29戸)	平均	17.3	14.7	15.4	13.9	14.7	15.3	15.1	16.8	15.4
			S. D.	3.13	3.07	2.43	3.13	1.36	2.49	3.14	2.53	2.66
			連帯度	**0.169**	**0.206**	**0.381**	**0.160**	**0.645**	**0.367**	**0.192**	**0.380**	**0.312**
天北	32	鬼志別 121.4 (23戸)	平均	17.8	15.7	14.7	12.7	13.0	15.6	14.6	17.3	15.2
			S. D.	2.80	2.11	2.68	1.83	2.56	2.59	2.79	2.15	2.44
			連帯度	**0.264**	**0.468**	**0.302**	**0.487**	**0.289**	**0.344**	**0.270**	**0.483**	**0.364**
十勝・新得	32	新内 125.7 (11戸)	平均	16 9	15.8	14.5	14.5	13.5	16.7	15.7	18.1	15.7
			S. D.	1.63	2.37	2.90	3.11	2.06	1.45	1.98	1.16	2.08
			連帯度	**0.560**	**0.405**	**0.238**	**0.182**	**0.439**	**0.644**	**0.645**	**0.727**	**0.480**
上川・士別	34	ニセパロマナイ 121.1 (21戸)	平均	17.5	15.9	13.6	13.3	12.1	15.1	14.8	18.8	15.1
			S. D.	2.26	3.42	3.14	2.68	3.01	2.02	2.71	2.69	2.73
			連帯度	**0.400**	**0.143**	**0.148**	**0.267**	**0.135**	**0.480**	**0.297**	**0.379**	**0.281**

十勝・大樹	28	拓北 137.0 (16戸)	平均	18.2	19.4	15.1	17.1	13.9	16.9	15.7	20.7	17.1
			S. D.	1.98	3.33	3.93	2.58	3.43	2.32	2.57	2.20	2.79
			連帯度	**0.537**	**0.245**	**−0.010**	**0.377**	**0.080**	**0.435**	**0.352**	**0.516**	**0.317**
〃	〃	共和 130.1 (18戸)	平均	16.6	17.7	13.8	16.6	14.1	16.5	16.8	18.0	16.3
			S. D.	3.41	5.30	4.99	2.94	2.81	2.87	3.22	2.33	3.48
			連帯度	**0.160**	**−0.259**	**−0.343**	**0.279**	**0.257**	**0.293**	**0.213**	**0.451**	**0.131**
		総平均 125.1 (185戸)	平均	17.5	16.0	14.8	14.4	13.7	15.8	15.3	17.9	15.7
			S. D.	2.70	3.18	3.22	2.90	2.52	2.40	2.83	2.35	2.78
			連帯度	**0.312**	**0.209**	**0.104**	**0.235**	**0.305**	**0.396**	**0.295**	**0.443**	**0.295**

第4表　既存農村における連帯度

所在	調査年度	既存農村名 平均	領域別 / 項目	I C. S.	II I. R.	III F. R.	IV S.	V C.	VI E. B.	VII L. G.	VIII T. A.	平均
函館	昭和30	大野 133.5 (77戸)	平均	17.2	17.7	16.5	15.9	15.1	16.4	16.1	18.6	16.7
			S. D.	3.17	2.87	2.91	2.31	2.51	2.49	3.52	2.85	2.84
			連帯度	**0.236**	**0.317**	**0.283**	**0.421**	**0.354**	**0.386**	**0.123**	**0.341**	**0.296**
余市	29	仁木 146.6 (30戸)	平均	17.2	16.8	16.3	16.9	13.7	17.3	16.8	17.9	16.6
			S. D.	2.77	2.82	2.64	2.26	2.01	2.49	2.81	2.38	2.52
			連帯度	**0.331**	**0.313**	**0.347**	**0.452**	**0.454**	**0.401**	**0.313**	**0.436**	**0.381**
後志	29	前田 154.9 (83戸)	平均	17.3	18.9	16.8	17.3	14.1	17.6	16.6	19.1	17.2
			S. D.	3.09	2.79	2.71	2.53	2.04	2.51	2.26	2.62	2.57
			連帯度	**0.257**	**0.353**	**0.339**	**0.391**	**0.455**	**0.403**	**0.431**	**0.402**	**0.379**

計	平均	17.2	17.8	16.5	16.7	14.3	17.1	16.5	18.5	16.8
	S. D.	3.01	2.83	2.75	2.37	2.19	2.50	2.86	3.62	2.64
	連帯度	**0.275**	**0.328**	**0.323**	**0.421**	**0.421**	**0.397**	**0.289**	**0.393**	**0.353**

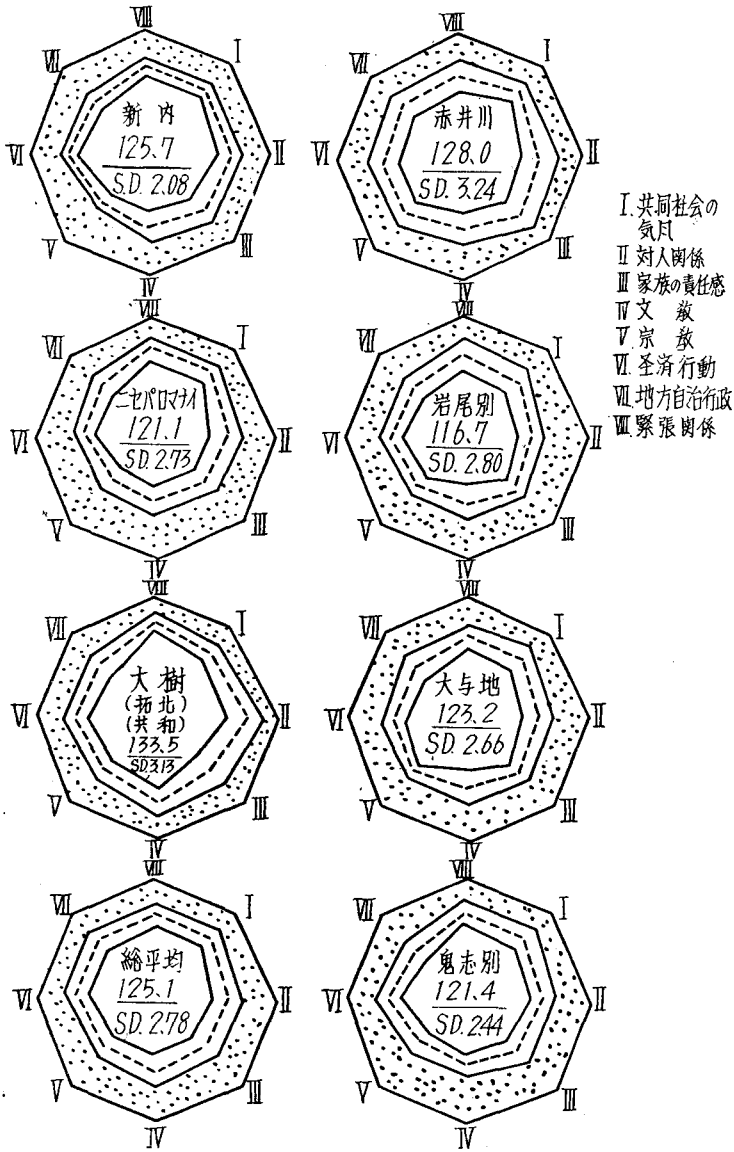
から、両者を $\frac{0.480}{0.131}$ として、倍率でみることは出来ない。しかし、0.480−0.131 として間隔をみることは許される。いずれにせよ、最高と最低の差は **0.350** であつて非常に大きい。これを**第4表**により既存農村と比較してみると、連帯度の最終平均値においては、既存農村の方が開拓部落よりも **0.353**(**既存平均**)−**0.296**(**開拓平均**)＝**0.057** 即ち二十%程連帯度が高いことが明らかである。また **S. D.** によつて表示される意見のばらつきも、開拓部落の方が既存農村よりも大きく、その差は、**2.78**−**2.64**＝**S. D.**≦**0.14** となり、可成り大きい有意差が認められる。

この測定調査では、連帯性を求める共通の規範体系が既村、開拓の双方に当てられているから、上記の差異は、既村農村の方が、一定の行動規範や価値観念に対して、よりまとまつた考え於をもち凝集性の強いことを意味し、開拓部落の方は、部落の歴史が短かく、しかも構成員が異質的であるために、一定の規範や価値観念に対して安定性がないことを示すものである。

次に、開拓部落における連帯性（S. D.）を、たフェスラーの八角型表示法によつて描写してみると**第1図**の如くであり、また連帯度をグラフにしてみると**第2図**及び**第3図**の如くである。

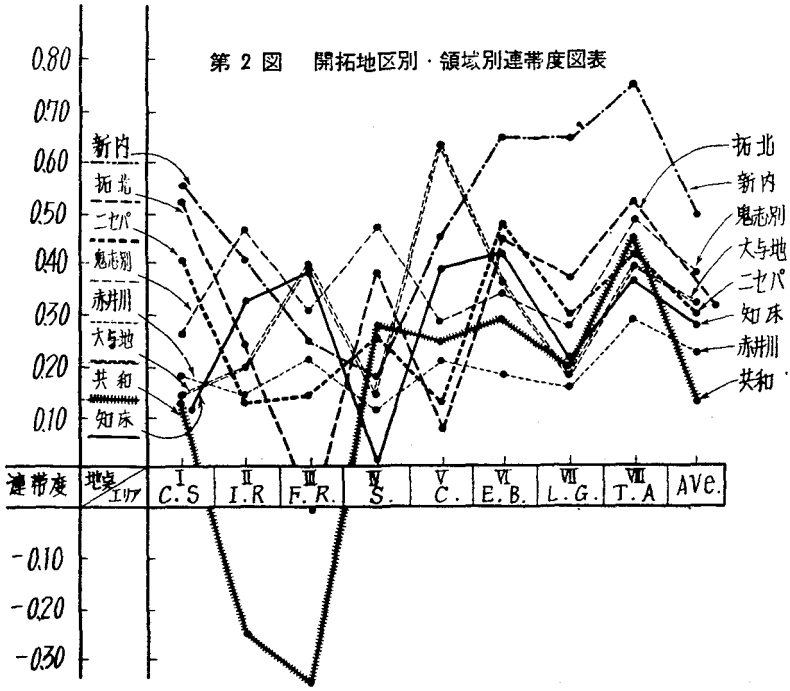
第1図の八角型図表によると、平均型は最も円満な形態をしめしているが、これに近いのは、「新内」「鬼志別」である。逆に悪いのは、「共和」「赤井川」等であつて、この表示は近似的に連帯度の指数と合致する。**第2図の「Ave」**のポイントは、「新内」「鬼志別」の順になつており、この間の事情がはつきりする。「新内」に連帯度が高いのは、新内の居住者の数が少いためであつて、その理由は「鬼志別」の場合と異なると思われる。また、開拓地と、既存農村における連帯度（性）を平均値によつて比較してみると、**第3図**の如くであつて、開拓と既存との間には一応顕著な差がみられる。

第1図　開拓部落連帯性図表

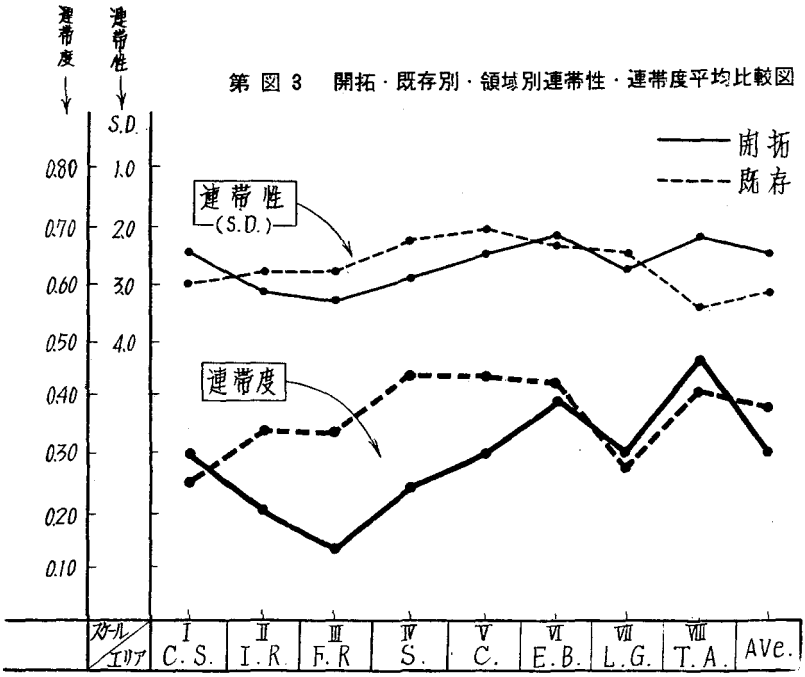


Ⅰ. 共同社会の気風
Ⅱ 対人関係
Ⅲ 家族の責任感
Ⅳ 文　教
Ⅴ. 宗　教
Ⅵ. 生産行動
Ⅶ. 地方自治行政
Ⅷ. 緊張関係

第 2 図　開拓地区別・領域別連帯度図表



第 図 3　開拓・既存別・領域別連帯性・連帯度平均比較図



六　領域別にみた連帯度の分析

連帯性及び連帯度を示めす地域別、領域別の指数は、前稿におけるそれと較べると若干異なつている。しかし本稿では測定プロセスにおける精度をあげたため、少くとも既存農村と開拓農村における連帯度の違いは極めて顕著にあらわれたと共に、八つの領域（エリア）における違いも一層明確になつた。

今、開拓地と既存農村における連帯度についての一般的特色を把えてみると次の如くである。即ち、

(1) Community Spirit, Economic Behavior, Local Government. の領域においては、開拓地と既存農村との間に一般にあまり大きな差はないが、Community Spirit の領域では、既存の方が開拓よりやや連帯性がおとつている。(但し「新内」の如き特殊な地点が入つている)。

(2) Intepersonal Relation, Family Responsibility, School, Church の諸領域では、いずれも既存農村の方が、開拓地よりも連帯度がかなり高くその差は大きい。しかし、Tension Area においては、逆に開拓の方が連帯度が高い。

(3) 連帯度が、既存開拓ともに相対的に最も高いエリアは、Tension Area であり、続いて、Economic Behavior の領域である。

(4) また連帯度が、既存、開拓ともに相対的に最も低いエリアは、Local Government の領域であつて注意を要する。

次に、八つの領域別にそれぞれの特色を検討してみると、次の如くである。尚この場合フェスラーの方式では、連帯性を表示する八つの領域（エリア）は、それぞれ五つの尺度文章によつて標識化されているので、尺度文章の意味に従つて各領域の概念規定を施しながら、連帯性の特色を描き出すことにする。

(1) C. S.……「Community Spirit」と称せられるこの領域は、尺度文章の意味内容からおして「共同社会の精神」というよりは、むしろ「**共同社会の気風**」あるいは「**風潮**」といつた概念に近い。それは、共同社会の構成員が各々自己の領域の地域集団社会に結びつけられている場合の相互感情や態度についての共同意識間における連帯関係をしめしたもので、そこから、所謂、それぞれの共同社会の「気風」とか「気質」、「風格」とか「風潮」といつた共同体意識が形成される。

この領域では、間拓地の場合は、部落によつて連帯度に可成り大きなひらきがある。即ち「**新内・拓北**」は非常に連帯度が高いが、

「**岩尾別（知床）・共和・大与地**」はかなり低く、最高と最低との間には連帯度 **0.438** という大きな差がみられる。これ対して、既存農村の場合は、いずれも近似した連帯度を保持し、上下の差は、僅か **0.085** しかない。これは開拓地の場合、部落民の意識構造が所によつて可成り異なり、区々であることを物語つており、まとまりのよい気風の所もなれば、その反対のところもあり、変容の巾が極端であることを意味している。

(2) **I. R.**……「**Interpersonal Relations**」即ち、対人関係における意識の連帯をしめすこの領域においては、既存農村の方が開拓地よりも一般的傾向としては連帯度が高い。しかし、「**共和**」はその例外であつて、マイナスの連帯度をしめている。このために開拓地における最高と最低の差は **0.727** と算出される。マイナスの連帯度とは、連帯度がないばかりでなく、非連帯の性向があると疑われるもので、測定に誤謬がないとしたら、この点注意する必要がある。蓋し、かかる部落は所謂「近所仲の悪い部落」だからである。この点において既存農村の場合は、どの地点も極めて近似しており、いずれも **0.3** 台を保ち、対人関係における連帯度は高い。しかし開拓地でも、**鬼志別・新内**では **0.4** 台で、既存農村以上である。これは人的構成の特異性からくるものであるとみられる。

(3) **F. R.**……「**Family Responsibility**」家族員が自己の家族の部落共同社会に対して抱く責任感がこの領域の意味であるが、開拓地では、この領域における連帯度が八つの領域中最も低く、高低格の差は極端で **0.724** の間隔がある。また、八つの開拓部落における **F. R.** の連帯度の平均値は僅か **0.164** にすぎないのであつて、既存農村のそれは **0.323** であり、その差は平均値において **0.159** であつて、この差は大きい。これは「**拓北・共和**」の二部落が、マイナスの連帯度をしめたためであつて、これを除くと、「**ニセパロマナイ**（**0.143**）」がかなり低く、あとは、既存農村と較べて大差はない。しかし一般的には、既存農村にくらべて開拓地の連帯度はかなりおちるものとみなければならない。これは様々の理由に基くが、その一つに、開拓農家の家庭生活が労働に追われ、家族員を十分顧みるいとまがないことをあげることが出来る。そして、この事実が、共同社会に対するこのエリアにおける連帯感を意識的無意識的に弱めることとなるのである。

(4) **S.**……「**Schools**」と複数の形で表現されているこのエリアの概念は、学校ではなくして、むしろ「**文教**」あるいは「**教学**」を意味する。この領域では、既存農村では非常に連帯性が高いが、開拓地では、鬼志別、拓北をのぞくと、かなり低い。このことは、子弟

の教育について、開拓地では未だ安定した意識が形成されていないことを意味している。この点については前稿における分析よりさらにはつきりした結果が得られた。

(5) C.……「Churches」宗教関係についての規範が標識となつているこのエリアでは、指数に若干の問題がある。即ち開拓地では既存農村における程、宗教団体の勢力が伸びていないため、宗教に対する関心が稀薄で、設問に対して反応を求め得ない場合が少くないからである。そのために開拓地におけるこのエリアの連帯度は大きくバラつき、上下の格差は **0.565** となる。この点既存農村では非常に安定しており、差は僅か **0.101** しかなく、しかもそのレベルは、大体において **0.4** 台であつて非常に高い。

(6) E. B.……「Economic Behavior」という概念は「経済行動」という日本語のもつ意味と合わない面があると思う。それは農家の営農観とかなりかけ離れた概念であり、どちらかといえば、部落の経済生活経済行動のあり方に対する規範的価値意識に近い。このような意味におけるエリアでは、開拓地の場合は、市街地における商店の役割とか、兼業機会などがかなり大きな意義をもつ。「新内、ニセパロマナイ、鬼志別、大与地、「拓北」なぞ、部落の近辺に立派な市街地や商店を持つ地帯では連帯度は高いが、岩尾別の如く兼業機会が多い所もまた連帯度が高くなる。既存農村も開拓に比較すると、開拓よりかなり高いなぞとはいえない。平均値でみると、**既存 0.397 開拓 0.396** で、全く同じ位である。

(7) L. G.……「Local Government」即ち、地方自治行政（村政）や部落の政治についての意識形態においては、開拓地の場合は、「新内」(0.645) を例外とすれば、連帯度はかなり低い。即ち、開拓地では望ましい政治が行われていないとする不満が多く、また連帯性にも欠けている。しかし、既存農村の場合も、函館の大野の如きは非常に悪く **0.123** である。いずれにせよ農村におけるこの政治的意識領域における連帯性はあまりよくなく、ことに既存農村では、他の領域における連帯度の指数にくらべて、L. G. の指数は非常に低位である。この事実は、村政、町政にたずさわる者にとつて今後の施策の方式に注意を要することを意味するものであり、自治体の P. R. は無論のこと行政当事者の積極的な行動による明るい村政の実現が切望される所以である。

(8) T. A.……「Tension Area」即ち、緊張関係における意識の連帯性はここでは「部落えの仲間入り」「男女関係」「もの判りの程度」「葛藤関係」「人種差別」等の標識によつて把えられることになつている。この標識のとり方は、集団内における各人の目標行動、要

求あるいは意志に対する相互牽制・矛盾・葛藤の面をかなりよくとらえることが出来る。結果としては、開拓地の方が既存農村よりも、この緊張関係のエリアでは好ましい傾向がみられる。「新内」の如く居住者の寡少な開拓地では緊張度はゆるく仲がよい。しかし既存農村では伝来的な諸般のものが作用して、緊張関係は強く、好ましい連帯関係はやや稀薄になる。しかしその連帯度は対人関係における程悪くはなく、一般に農村の場合、対人関係における連帯度は緊張領域におけるそれよりも好ましくない傾向がみられる。いずれにせよこのことは、人間関係をめぐる近代化、社会化が遅れているためであると考えられる。

領域別に連帯度を比較分析する操作はこれに尽きるものではなく、領域相互間の関係をはじめ分析すべき多くのものを残している。しかし、ここでは一応この程度の比較分析を明らかにするにとどめて結論に入りたい。

七　結　論

本稿において詳述したフェスラー方式の応用にもとずく連帯度の測定によつては、結果的に開拓部落におけるこれが特色と既存農村における特色との差異をかなり明白に把えることが出来た。結果的には、開拓部落の方が総体として、既存農村よりも連帯性が低目であるということが出来る。しかし、見方を変えれば本稿において掲載した連帯性、連帯度をめぐる数値と前稿にくけるそれとの間には、若干のずれがあるので、その真偽の程が問題になるかも知れない。しかし、数値はあくまでも、相対的に事象の性質をあらわした表現形式にすぎないから、無条件に数字の価値そのものにこだわることは許されない。ただ操作上吟味を施した関係からして、本稿において展開された数値の方が前稿のそれよりも正確であり、従つてまた既存と開拓との差異をよくあらわしていることは事実である。

連帯性や連帯度をめぐる以上の分析結果は、社会学的にも心理学的にも、また行政、政治の当事者がもつ立場からしてもまことに興味に価するものがあると思われる。しかしこれを一つの社会的事実としてどこまで信頼すべきかについては問題があり、軽々に盲信することは許されない。少くとも本調査に関する限り調査時点にずれがあることに留意しなければならないし、また、それぞれの部落における連帯意識の構造が時とともに変動することを加味しなければならぬからである。

これらの点においてなお研究を継続すべき課題が残されているが、しかし乍ら、フェスラーの方式によつてなおよく本道の農村にお

ける社会事象の一つを測定に把握し、これを量的に比較分析する可能性が以上の実験的測定によつて立証されたことは一つの収穫であつた。この測定によつて発見された連帯性をめぐる findings が、既成の農村社会理論といかなる関係を保つか、あるいは連帯性をめぐる各領域における特色が、何に起因するか、それらの問題を、社会学的立場から総合的に吟味し、また裏付けすることも重要な課題である。しかしこの研究を進めるためには、社会学における理論との接近が必順とされと同時に、多角的な農村調査の展開による社会事象の正確な把握と整理とが平行的に展開されなければならないのである。

（一九六〇・一・二〇）